

春雷 奈良 山岡宏堂

文化の日の高層聳え都心冷ゆ
葉牡丹灯に驕るかに画家の武

左義長に餅焼く子等は諍ひつ
雪つる年月も槽火に集ひかな

若葉萌ゆ

股引の膝曲げにくし蕪引き

在福岡 原田 筑水 (直吉)

大宰府に詣でて梅は早かりき
打出しのしころ囃や朧月

五日程早しと和尚梅の花
雛壇の灯を消す頃の雪気配

春雷に応へて馬のいな、ける

若葉萌ゆ能古万葉の碑の除幕

俳句

水口 二郎

香袋の仄かに薫る春衣着る

露けしや暎やさしき露坐仏

還らざる霧笛に瀬戸の海明けぬ

一枝の桃を供えて雛まつる

梅雨寒や銅貨が戻る赤電話

歳月の蹙音は遠し秋の雲

夜す、ぎの流れに飛び交ふ螢かな

閉山の鉄路草葉の露繁く

外人も茶席の客や月今宵

雲の峯後押車の通り行く

曼珠沙華駅長の指呼電車発つ

売れのこる金魚に広き桶となる

画家の武

柳田 義一

立春に薄手のオーバー気にならず

頭より転んで翅た、ぬ蜜蜂や

寒鴉落つるが如き入陽かな

女遍路一人の白さ抱える雪の路

喜寿祝う大杯わがもの明の春

才覚つかぬ鴉が梢に猛るなり

摩耶の夜や寒星の屑灯を渦に

(元播磨造船所)

原稿募集

内容 随想、和歌、詩、俳句、絵画、写真
鈴木時代の思出等

原稿用紙 四百字詰 五枚程度
締切り 昭和五十年十月末日
送り先 〒650

神戸市生田区京町七二
太陽鋳工(株)内
「たつみ」編集部宛

句集「風」の刊行

小倉 記

永年に亘り俳句趣味に徹せられて来た
柳田さんが句集第三輯「風」を氏の喜寿
に因み上梓されたことは欣ばしい。伊予
手梳きの和紙を材料としてフランス綴り
になる洒落た装幀、タテ16cmヨコ10cm、
ページ数80、携帯には手頃のものである。
内容は昭和四十二年度から五十年迄の
作品三百三十題の労作。写植の字体も風
変わり、余り例のない句集と云えよう。

題名のよりどころは佳作中の
「凧のみが知る風の裏おもて」からとつ
たものと云うことである。今回の発行数
は僅少であるが、会員の同好の方で御所
望の方には呈上されることである。(郵
券五十五円封入)
御申込みは辰巳会本部編集室へ。

たつみ 春秋抄 第六話

黄旗亭

(一) 序曲 本店の建物

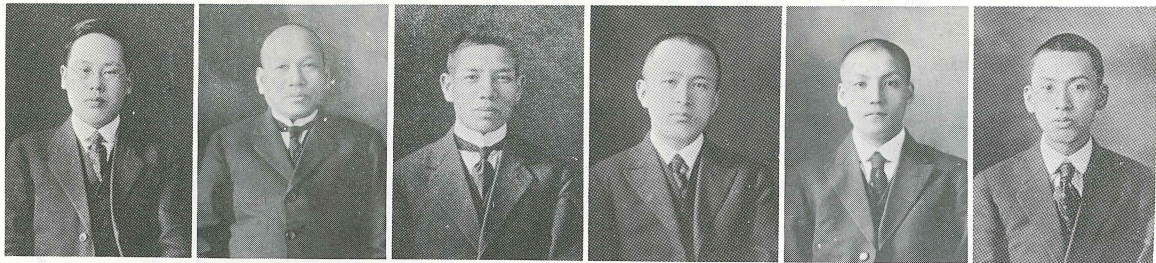
明治の後期(三十五年頃)から
大正の初めにかけて鈴木商店は栄
町三丁目六番地にその本拠をかま
えた。それ迄にも幾つかの店舗を
遍歴して来たが、その度毎に商勢
を拡大し、此所で初めて合名会社
の組織と総合商社としての陣容を
一新し名乗りを上げたのであった。
筆者は寡聞にしてそれ以前の事は
よく知らない、そして茲ではその
鈴木商店の胎頭期を育て上げた栄
町本店の事を仮に初代の店舗と呼
ぶ事にする。街の一砂糖商から身
を興して神戸の中心部に隠然たる
商勢を誇示する様になったこの時
代の店舗が、ある意味では一番充
実した意義を孕んで居たかも知れ
ない。そして大正三年、東川崎町
一丁目の元ミカドホテルの建物を
買い取って其所へ移転、勃興期の
厩を天下に扱めた本格的商社ビル

(二) 文響曲 柳田さん日野さんと会計部

ルネッサンス式世紀風建物の
本館二階、リノリウムを敷きつ
めた長い廊下を浜がわ(南)へ突
き当ると一番端つこの東南の隅の
室が会計部である。階下の玄関わ
きにある出納部も会計部の所管な
ので常々本店の内部では「二階の
会計」「下の会計」と呼びならわ
されて居た、この双つの部を掌握
して大厩の扇の要を預つて居るの
が御大 李兵衛居士 日野誠義さ
んであるのは言わぬ事である。
東川崎町一丁目の本店ではその頃
毎日、破れ鐘の様な日野さんの豪

傑笑いが聞こえぬ日はなかった。
その二階の会計部を起点として
北隣りの山がわへ直輪経理部、文
書部、重役室と東面して並び、廊
下をはさんで向い側に支配人室、
燐寸部、応接室が中庭を見下す位
置にあった。重役室だけは廊下か
ら直接這入る事が出来ず、一旦、
文書部秘書課の椋野さんを通じて
からでないと隣室の金子さん、柳
田さんの処へは行けない、流石に
何の部室も以前は一流ホテルとし
て神戸では名前の売れた建物だけ
に内装も設備も中々華麗なもので、
間取りも大きく随分ゆつたりして
居た。今でも印象に残つて居るの
は、天井から釣り下つた豪華なシ
ヤンデリアと、リノリウムを敷
きつめた床面と、そして各部室毎
に古風な暖炉が造りつけてあつた
事である。尤も、その時点では既
にスチーム暖房に切り替えられて
居たのでマントルピースは単なる
飾り物でしかなかったが、クラシ
ックで重厚な名残りをとめて居
た。

大正七年の初め頃、私は僅かな
期間だが会計部に勤務した事があ
つた。半年にも満たぬ短い日時で
はあつたけれど、生れて初めて見
知らぬ他人ばかりの社会へ飛び込
んだ初奉公だけに幾多の思い出は
忘れ難いものがある。この時分の
会計部の構成メンバーは、日野さ
んを主任に、大塚清次、賀集益蔵
松下綱一、河村保、佐川實、武井
重文、松井元、鈴木義則、柳田義
一、近森菊馬、岩元吉備郎、山村
善一郎、畑本千代三、池野輝夫の
諸氏が居た。無論、私は一番下っ
端のぼんさんでドンゴスの様な
御仕着せの服を着て一年先輩の池
野君の教えてくれる通り立働いた、
掃除と、お茶汲みと、銀行ゆきの
使い走りがかかる日課であつたが
特に、朝晩倉庫からの膨大な帳簿
の出し入れは中々きつい重労働で
不慣れの身には部厚い洋帳の重さ
が腕に食い込む様で廊下の中道で
何度へたばつた事かしない。
御大の日野さんは大きな太鼓腹
を突き出して、禿げた頭の後のあ
たりをびしやびしやた、くのが癖
で、村夫子然とした飾り気のない
人であつた。一寸見にはごわん／＼
した近より難い感じがしたが頗る
明けつぷりうげで陰湿な所が少しも
なく大声で活達で馴れると親しみ
易い人徳のある人であつた。人呼
んで李兵衛さんと云う、御本人は
知つてか知らずか、将に云ひ得て
妙である。「ぼんさん こんなぬ
いお茶が呑めるかいナ、もつと
熱いのをよんでくれんかい……」
思わせる様な口をして居られる。



河村 保氏 日野誠義氏 大塚清次氏 松井 元氏 柳田義一氏 佐川 実氏

私は秘かに自分だけが「獅子舞のおじいさん」と名付けて居た、日野さんと極く親しいので偉いお方には相違ないが、何うして毎朝会計部へ何んな用事で来られるのやら、店の何部の何んなお偉いさんかそんな事は新米小僧の私の知る由もなく、部室へお見えになると直ぐ池野君の合図でお茶を差し上げるのが私の仕事であった。それが誰あろう柳田富士松さんなのである。義一さんのお父様で金子さんと並んでの重役さんと知ったのは可なりの日が経ってからであった、大柳田さんと日野さんとは大の仲よしで性格が対称的であり乍ら大変うまが合う様であった。日野さんにも義一さんと云う息子さんがある、偶然の一致か何うかは知らぬが、金子さんが西川支配人に私淑して御自分の息子さんに文蔵と名付けられたのと話がよく似て居るので、大柳田、日野の親密さは公私以上の物であつたらうと考へられたがそれはずつと後の事である。

初夏の陽ざしが窓越しに事務室をおとす頃、暑がりやの日野さんは早くから上着をぬぎ捨て、殆どチヨッキ姿で一日を過される窓を開けて風を取り入れたり、扇風機を廻したりと書類が飛ぶのを紐でしぼる様になつて居る、何うやら傳の中え落したらしい、すまんが一度直ぐ帰つて傳の中をしらべて来て呉れないか……との事である、これは大変だ、無論二つ返事で私等は飛び出した。そして今来た道を全力で疾走した。人力車と云うものは客を乗せた時は一さん走りだか空車の時はゆるゆる歩いて帰るのが定まりである。私等の足は間もなく傳に追いついた「オーイ 金熊」と呼び止めるのに時間はかゝらなかつた。傳夫がげんなり顔をして居るのを手短かに訳を話し一人が腰掛けの上の膝かけ毛布を除けると、あつた！ あつた！ 蹴込みの奥の仕切りの中に傳夫の持物に交つてまぎれもない「印田」の皮袋で、締め紐の元に真赤なサンゴの根締め付いたのが見付かつた。私等は、

の事で思ふにまかせない、そんな時でも柳田さんは何時も几帳面に上着を着用して居られる。本店の中で一寸した流行になつたのが所謂「柳田ポーズ」である、御承知の様に上着の前をはだけて、両手の親指をチヨッキの腋下にかけ両の肘を張り出す独特の格好である。少しも気取らず、如何にも寛活でユーモラスな風格を備えて居られた。たばこを嗜まれぬ大柳田は

彼の事については後章でも一度登場してもらふ事になる。

(三) 協奏曲 中山手の歓声

何時の頃のことであつたらうか、暑い時か寒い時かの記憶すら定かでない。五十年前の遠い昔の事である。大正八、九年頃の事で既に二代目建物は焼失してこれからの話は新しく急造されたバラックの仮建築で三代目建物の時代の出来事である。私も漸く入店後二年余りを経て、やゝ扇の人間らしくなりつゝ、あつた頃でこの時は保険部勤務となり横山正躬親分の下で立働いて居た、そんな或る日、突然文書部の吉野が顔色を変えて私の処へ飛び込んで来た。「柳田さんが急にかげんが悪くなられて今から本宅へ帰られる事になつた、それで僕と君とを呼んでほしいと云われて、今から本宅迄ついて行かねばならぬのだが、何うやらうか……」と云うのである。私は呆気に取られたが間もなく前後の事情が呑み込めると横山さんは「君、直ぐ行って来給え」と御命じになつた。柳田さんはもうその時、金熊の人力車帳場迄歩いて来られ少し元氣を取り戻された様だったが兎も角中山手のお宅迄私共二人が傳の後から付いて行く事になつた。吉野も私も、その頃、柳田さんの

た、当時の数少ない女子職員の富田さんが古い僚友と共に辰巳会の春秋を飾つて下さるのには又別な年輪を感じられる。悪いくせでつい話が横道へそれてしまつたが再び本筋へ戻す事にして、さて重大なハプニングを思い出し乍ら筆を続けよう。大柳田を乗せた人力車は吉野甚一郎と私の二人が後押しをし乍ら柴町四丁目の第一銀行の横から元町間の踏切りを渡つて山側へ坂を登つて行つた、傳曳きはよく地勢をわきまえて居て此処の坂が一番「こうばい」がゆるく登りがなだらかで楽なのを知つて居る、早野勤平の早打ち籠の様に私等三人曳きで坂道を物ともせず中山手通り迄駆け上り一きよに本宅迄つ、走つて行つた。この時期、義一っあんは大阪支店へ転勤された後で彦次さんを中心に他は女手ばかりで心配顔に迎へにいられた、案じられた程でもなく間もなく小康を得られた様で私等も少憩の後再び店へ帰らうとした、その時である、思いもかけぬ大きな声で柳田さんがさも慌てた様に私等と呼ば止められ「えらい事をした、傳で店を出る時は確にポケットに入れたのおぼえて居るがはんこを入れたこれ位の大きさの巾着を落してしまつた、茶色の皮の袋で口

を紐でしぼる様になつて居る、何うやら傳の中え落したらしい、すまんが一度直ぐ帰つて傳の中をしらべて来て呉れないか……との事である、これは大変だ、無論二つ返事で私等は飛び出した。そして今来た道を全力で疾走した。人力車と云うものは客を乗せた時は一さん走りだか空車の時はゆるゆる歩いて帰るのが定まりである。私等の足は間もなく傳に追いついた「オーイ 金熊」と呼び止めるのに時間はかゝらなかつた。傳夫がげんなり顔をして居るのを手短かに訳を話し一人が腰掛けの上の膝かけ毛布を除けると、あつた！ あつた！ 蹴込みの奥の仕切りの中に傳夫の持物に交つてまぎれもない「印田」の皮袋で、締め紐の元に真赤なサンゴの根締め付いたのが見付かつた。私等は、

明の要がない、こうしてこの一件は目出度し目出度しで一先づけりがついて納まつたが、私にはもう一つ後日話があるのを付け加えなければならぬ。

(四) 幻想曲 春秋の郷愁

兎にも角にも一同が胸を撫で下して居る時「二人共 ウラの宿舎の坊んさんや、黄旗君は一番ガキ大将で、僕はよう喧嘩して泣かされるけどそれでも一番仲のえ、坊んさんや」と彦次さんが云つたものである。私は顔から火が出る様な思いがして全身に冷汗をかいた、大柳田の前で日頃の悪行を素っ破抜かれて穴があれば這入り度い様な心地がした、だがそれは決して悪意を含んだものではなく勿ろその逆で言わば親近さを最も簡単に表現された言葉であつた。柳田さんは何も云われず何時もの温容に微笑をた、えてヂツと私を見つめて居られた。私はその時の大柳田の顔と彦次さんのふれ合う様な気持ちを今も忘れる事が出来ない。

何十年かの歳月が経つた、とても事表現し難い様な歴史が夢の様にかつて行つた。そして或る日辰巳会の招請を受けて神戸へ向う国鉄の車中で偶然、彦次さんと同席した。双方共、五十歳を過ぎて老境の入口にさしかつた様な年

輩であつた。それでも真つ先に脳裡を横切るものは少年の日中山手の柳田邸とその別館に起居した朝夕であつた。悲しくも戦争の爪あとにかゝつて今はその面影もない、彦次さんの胸中去来する実感は何知と出合つて又一しおの物があろうと推察した。それ以来辰巳会での会合の席は必ずと云つてよい程私等は隣り合せて坐つた、そして、何かの時、「昔 親父がはんこを失うて君に拾うてと、けてもらつた事があつたなア あれは日本商業の印で、親父が常に身辺から離さず持つて居たもので、落したと気がついた時は流石の親父も青うなつた、それが直ぐ見付かつたものだから一べんに機嫌が直つて、とたんに病氣も忘れて、あの時、僕等にも小使いを奮発して呉れた。君はそんな事知つて居るか……」と云う。そんな事もあつたのかと昔に思いを廻らせても見たが後の事は私等には関係がない、それよりも彦次さんと昔の様に屈託なく話し合える方が私には何んなにか嬉しく思えた。そして又幾年。